

神殿育ちの嫌われΩは

隣国の伯爵αに蕩ける愛を刻まれる

目次

世界観&キャラクター&関係図

プロローグ

第一話 婚約者の非道な仕打ち

第二話 運命のアルファとの出会い

ダイジェスト1

ダイジェスト2

世界観&キャラクター&相関図

世界観・用語

世界観

舞台は、女神イーリスを信仰するランダリエ王国。

この国では、オメガは「聖樹」と呼ばれ、
神殿に保護される特別な存在です。

ランダリエ王国以外の国では、
オメガは蔑まれ、差別される対象です。

主要用語

- ✧ 聖樹（せいじゅ）：ランダリエ王国で神聖視されるオメガ。
- ✧ 聖花女（せいかじょ）：聖樹に直接仕えるベータの女性。
- ✧ 神の加護の循環期：ランダリエで使われる、
オメガの発情期を指す言葉。
- ✧ 番（つがい）：アルファとオメガが
特別な絆を結んだ関係。

エマ

(エマヌエーレ・イーリス)

【ランダリエ王国】



第2王子の婚約者



聖樹



平民出身

健気で心優しいオメガ

婚約者に虐げられている

ルシアンが好き



ルシアン

(ルシアン・ダイヤモンド)

【オスティン帝国】

25歳

ダイヤモンド伯爵

番を持たないアルファ

皇太子の側近/親友

クールな参謀



ナタリナ

(ナタリナ・ケイル)

【ランダリエ王国】

26歳

侍女（聖花女）

エマの忠実な侍女

ケイル男爵家の長女

時々過激な発言をする



ティエリー

(皇太子殿下)

【オスティン帝国】

25歳

帝国の皇太子

アルファで妻子持ち
ルシアンの子友/親友
堂々たる為政者



ダリウ

(王太子殿下)

【ランダリエ王国】

26歳

ランダリエの王太子

アルファで妻子持ち

レオナールの異母兄

気品あふれる優しい王子様



ノエル
(ノエル・ヴァンス)

【オスティン帝国】

28歳

ルシアンに従者

ルシアン
の忠実な従者

美的センスに優れる

温和で優しい性格



レオナルド

(第2王子)

【ランダリエ王国】

18歳

側妃が産んだ王子

エマの婚約者でアルファ

傲慢で癩癪持ちの女好き

従者と共にエマを虐待する



ドレイク

(ドレイク・サンバール)

【ランダリエ王国】

24歳

レオナールの従者

レオナールの乳兄弟

伯爵令息で加虐嗜好あり

エマへの虐待を主導する





命令
上司



信頼
気にかける



主従



好き
好き

いじめる
嫌悪
憎悪

信頼
忠誠

プロローグ

エマの躰は燃えるように熱く、息を吐きだすのも、やっとだった。

「はあッ……んうっ、ううッ」

ヒートと呼ばれる発情の時期は、いつもこうだ。

エマが理性を保とうと歯を食いしばっても、躰の奥が激しく疼いて仕方ない。

エマは成人を迎えているが、十六歳という若さゆえか、ヒートがことさら辛く感じられる。

オメガであるエマは、まだアルファの番（つがい）を持たない。

だから、ヒートが終わるまで、一人で耐え抜くしかないのだ。

そう思っていたのに。

「私の、可愛いエマ」

エマを覗き込む、甘い眼差し。

銀色の長い髪に、ルビーのような赤い瞳は、まるで月の精のようだ。

エマが密かに恋い慕う、銀髪のアルフア。

「あんツ、はあッ……る、ルシアン様ッ」

「エマ。もっと声を聞かせて」

囁く甘い声に、ビクビクと躰が震えた。

ここにいないはずのない彼が、火照ったエマの躰を慰めようとしてくれる。
いる。

「ああん、ああつ、やあんつ」

夜着（よるぎ）を纏うことを許されなかったエマは、裸のまま秘部まで

晒していた。全身の肌を赤く染め、張りつめた雄から白濁の蜜をこぼし、汗と愛液でシーツを濡らす。

エマはもう何時間もの間、牝の疼きに耐え、一人で何度も果てた。

敏感になった牝は、ルシアン指先が肌を撫でるだけで、身悶えてしまふ。

（もっと、触って欲しい……っ）

エマは無意識に腰を揺らし、ルシアンのゆるい愛撫に喘いだ。すると、ふいに股間をひと撫でされる。

「ひゃあッ！ あ、ああんッ！」

淫らな刺激に、嬌声を上げる。

エマの瞳からは、ポロポロと涙があふれた。

快楽に悶えるまなじりに、ルシアンがそっと口づける。

そして、耳元で甘ったるく囁いた。

「私の愛しい薔薇。貴方は、大人しく愛でられていれば良いのですよ」

「あんつ、そ、そんな」

首を振るが、ルシアンの手は止まらなかった。

フツと笑みを浮かべ、エマの昂ぶった雄を扱く。

「ひゃううツ!!」

「ああ、もうイってしまいましたか」

ビクビクと躰が跳ね、頭が真っ白になる。

だが、絶頂を迎えた躰に、容赦なく次の快楽が襲いかかった。

「ア、ああッ……んああ、アアッ!」

ルシアンのしなやかな指が、緩んだ蕾を搔き回したのだ。

すでに愛液に濡れているそこは、ルシアンの指を悦んで受け入れる。

「ああん、ああつ、やあんっ」

グチュグチュとイヤらしく響く水音に、耳を塞ぎたくなる。

それなのに、蕾はキュツとルシアンを締めつけ、離そうとしない。

「フフ、ここは正直ですね」

「ああッ」

ルシアンのからかう声に、エマは思わずシートに顔を埋めた。

視界からルシアンを追い出しても、中を弄る指は止まらない。

前にも、こうして蕾を弄られたことはあるけど、あの時よりも、ひどく

感じてしまう。

ルシアンの長い指がイイところを突くたびに、白濁がほとばしった。

「アアッ……はあ、んんっ」

「エマ、我慢せずにいきなさい」

「ひゃああっ！」

ルシアンに指に攻められ、はしたなく乱れて、何度も絶頂を迎えた。
快楽に理性を溶かされるうちに、エマは淡い夢をみてしまう。

（ルシアン様が、僕を抱いて下さったら）

あの美しいルビーの瞳に射貫かれて、雄々しい昂りに、最奥まで穿たれたら。

どれほど甘美な絶頂を迎えられるだろうか。

想像するだけで胸が震え、思わずルシアンシャツを掴んでしまった。

「あん、っ……あああっ」

「エマ？」

「ルシアン、さま」

この方に、抱いて欲しい。

エマの恋心も、オメガの本能も、それを望んでいる。

だけど、わずかに残った理性が、冷たく咎めるのだ。

（……そんなこと、許されるはずない）

どれほどルシアンを恋い慕っていても、エマの婚約者は他にいます。

この国の、第二王子。

いつもエマを見下し、虐げてくる酷い男。

だけど、不貞を犯せばエマは罪に問われるし、ルシアンもただでは済まない。

そこまでして、エマを望んでくれるとは思えなかった。

「ッ……ううっ」

「エマ、泣かないで下さい」

「あ……っ」

ぼやけた視界に、ルシアン心配そうな顔が映る。

エマはあわてて涙をぬぐった。

「あ、ぼ、僕……っ」

「貴方があまりに可愛いから、意地悪しすぎてしまいました」
ルシアンが、優しく頭を撫でてくれる。

困ったような顔でエマを見つめ、頬にチュッとキスをする。

「る、ルシアン様っ！」

「エマ。貴方のヒートが落ちつくまで、側にいます」

「……はい」

ルシアンの言葉に、エマは微笑んだ。

愛しい人の手で、この身を慰めてもらえる。

だから、エマは幸せだった。

叶わない願いに、胸を引き裂かれたとしても。

（――ルシアン様が、僕の婚約者だったら良かったのに）

第二話 婚約者の非道な仕打ち

「あああ……うつ、くうつ」

エマが身じろぎするたびに、ベッドの脚がギシリと音を立てた。

羽毛ではなく、藁が敷き詰められただけの粗末なベッドだ。敷布は色褪せ、体を覆うシーツは摩耗している。

古い家具に分厚いだけのカーテンで覆われた、みすばらしい部屋。ただ今のエマには、それを嘆く余裕もない。

ヒートが始まって、どのくらい経ったのか。

「ああッ、はう……あ、ンッ」

エマは苦痛に喘ぎながら、ベッドの上でひたすら耐えた。

高熱を出したときのように体が熱く、額から汗がしたたり落ちる。

金色の短い髪が、首にべたりと張りついた。

腰の奥が激しく疼き、何度となく己を慰める。

それでも、熱はおさまらない。

「はああッ、ッ……あ、あああッ」

吐き出す息さえ苦しくて、涙があふれる。

エマはベッドの上で身を丸め、シーツをかきむしった。

ジクジクと疼く熱は、エマの思考を快楽の渦に巻き込もうとしてくる。

「ンッ、うう……ッ」

抑制剤を使わないヒートが、これほどつらく苦しいなんて、今まで知らなかった。

十四歳で初めてヒートを迎えた時からずっと、エマは抑制剤を服用して

過ごしてきた。

それでも、ヒートの時期がくれば微熱や倦怠感に悩まされる。だから自分の体は、体質的に薬が効きにくいのだと思っていた。

だが、それは間違いだった。

『オメガは、快樂に溺れる獣』

他国でそのように揶揄され蔑まれる理由を、この身をもって思い知らされた。

「んああつ、ああ、アアッ」

木綿の夜着をはだけさせ、シートで下半身を隠して自らを慰める。

そうして精を放つと、疼きがやわらぐ。

疼きも熱も落ちつかせたくて、エマは自らの昂りを握りしめると、夢中で扱き出した。

「あ、アアツ……あああんツ！」

ヒートした躰は、あつけないほど簡単に絶頂を迎える。

ビクビクと躰が震え、乱れた息を必死に整えていると、あざ笑う声が聞こえた。

「ハハツ、またイったのか？」

「あつ……で、殿下ッ」

ベッドにうずくまったまま、エマは視線を上げる。

豪華な椅子に腰掛け、嘲りの笑みを浮かべるのは、栗色の髪と瞳を持つ若い男。

最高級の生地で仕立てた服を纏い、意地の悪い顔をした彼が、第二王子のレオナルであり、エマの婚約者だった。

王族の婚約者選ばれた者は、西殿（さいでん）の中にある「琥珀の館」

へ移り住むのが慣例だ。

だがレオナールは、エマを館には住まわせず、館の離れにある小さな部屋をあてがった。

元々は、使用人が住んでいた部屋らしい。

さらにレオナールは、エマの持ってきたわずかな荷物から、オメガに必要な抑制剤も、ヒート時の熱を静める鎮静剤もすべて取り上げ、この離れで暮らすように命じた。

『貴様には、この使用人部屋で十分だろう？』

侮蔑のこもった目で見下し、エマを蔑んだ。

本来ならエマは、レオナールの婚約者として琥珀の館で閨を共にし、子を産むのが役目である。

だが彼は、エマのヒートが始まると離れへやってきて、見物を始めたの

だ。

ベッドの上で苦しむエマを、酒の余興でも楽しむかのように眺めている。レオナルドのために用意された、豪華な椅子と大理石のテーブルだけが、古い部屋の中で輝きを放ち、異質な空間を生み出していた。

「んうッ……はあ、はあっ……アアッ」

エマはシートで下半身を隠し、熱い息を吐きながらレオナルドを見上げる。

（苦しいッ……助けてっ！）

薬さえあれば、まだ耐えられる。

レオナルドに助けを求めようとしたが、醜悪な笑みを見てしまうと、声が出なかった。

「オメガというのは、浅ましいな」

レオナールは笑いながら、金細工の杯を揺らす。

椅子に体を預け、足を組んで尊大な態度をとりながら、エマの痴態を冷たく見下ろした。

「このように卑しい平民の男が『聖樹（せいじゅ）』などと、ずいぶん馬鹿げた話だ」

不快そうに呟くレオナールに、従者のドレイクが頷いた。

「仰るとおりです、レオナール様」

ドレイクは蛇のような目でエマを冷たく睨む。

「聖樹とは本来、高貴な生まれのオメガが担うもの。平民ごときを聖樹に仕立てるなど、王族への冒瀆です」

「まったく。見ろ、この卑しい有様を。人目もはばからず、自慰に耽つてるのだぞ？」

「ええ。汚らわしいオメガです」

レオナルドの嘲笑に、側に控えたドレイクも侮蔑の目を向けてくる。

ヒートに苦しむエマを助けるどころか、あざ笑ひ、貶める。

婚約者とは思えぬ仕打ちに、エマは震えながら奥歯を噛みしめた。

（どうして）

なぜ、こんな目に遭うのか分からない。

他国ではオメガへの蔑視が強いと聞いてるが、このランダリエ王国に限っては違う。

オメガは「聖樹」と呼ばれる、尊い存在だ。

ランダリエの大神殿で身を清めて育ったオメガは、アルファと番うと「必ずアルファを産む」からだ。

そのために、王国では生まれた子供がオメガだと分かると、身分を問わ

ず大神殿に入れられる。

エマも貧しい村で生まれたが、巡礼で訪れた神官に見いだされて「聖樹」
となった。

いずれ高貴なアルファに嫁ぐ身として、厳しい教育を受けてきたのだ。

第二王子との婚約は王命だったが、立派な伴侶になろうと決意したのに

……。

レオナールは、エマに名を呼ぶことも許さず、婚約式の後には「貴様に
必要ない」と婚約指輪も取り上げた。

「んあッ……お、お願い、しますッ……どうか、葉を……ううつ！」

「ふんっ。卑しい平民にやる葉などない」

苦しみから逃れようと縋つても、レオナールは冷たく言い放つ。

「ああッ……ど、どうして……アッ」

襲い来る熱に悶えながら、エマはレオナールに問いかけた。

「なぜ……このように酷い仕打ちを、なさるのですか？」

離れに軟禁され、薬を奪われ、ヒートの時期に入っただけ、激しい苦痛に苛まされる。

ヒートした体は、焼かれたように火照り、腰の疼きは止まず、いくらいつてもまた昂ぶりが頭をもたげる。

もうまる一日、水しか口にできずに身悶え、汗と精液でシーツをびっしょりと濡らした。

疼く熱に苦しむエマに、レオナールは杯をギリツと握りしめる。

「なぜ、だと……!？」

鋭くエマを睨みつけ、怒声を上げた。

「王妃も、兄上の正妃も、公爵家出身の令嬢だ！ それなのに、オレに与

えられたのは平民の男だぞ!？」

レオナールは杯を床に投げ捨て、激昂する。

「貴様のせいで、オレはとんだ笑い者だ!」

「ッ……」

罵声を浴びせられ、エマは身を縮める。

けれど、それはエマが望んだことではない。

「こ、この婚約はッ、……陛下が、お決めたことなんです」

「ああ、そうだ!」

王命であることは、レオナールも理解しているはずだ。

それでも感情が抑えられないのか、腹立たしげに床を蹴った。

「くそッ……貴様が婚約者などと、考えるだけで虫唾が走るッ!」

吐き捨てるレオナールの隣で、控えていたドレイクが新たな金の杯に酒

を注ぐ。

レオナールは受け取ると、苛立った仕草で杯を煽った。

「オレほど不幸な男は、大陸中を探しても他にいない！　そうだろ、ドレイク？」

「ええ。誠に痛ましいことです」

ドレイクは悲しむような声で同意し、レオナールに囁いた。

「レオナール様の御名を傷つけた者に、罰を与えるべきでは？」

「罰？」

「はい。アレはレオナール様の所有物です。レオナール様がどのように扱おうと構わぬ玩具ではありませんか」

ドレイクは下卑た笑みを浮かべ、エマを見下ろした。

それに気を良くしたのか、レオナールが唇を歪める。

「そうだな。平民の分際でオレを笑い者にした罰は、受けてもらうぞ」

「ひッ」

嫌らしく笑うレオナルドに、エマは肩を震わせた。

鎮静剤も与えられず、悶え苦しんでいるのに、さらに苦痛を与えようというのだ。

危険を察したエマは、逃げようとベッドの上をずり上がる。

「貴様がどれほど卑しい存在か、分かせてやる」

レオナルドの合図に、ドレイクがベッドに近づいた。

「やッ、こ、こないで……っ」

ドレイクは顔色一つ変えず、怯えるエマからシーツを剥ぎ取った。

「アアッ！ やッ……はあぁっ」

隠れていた下半身が、男たちの前に晒される。

半勃ちの雄からは蜜があふれ、股間はドロドロに濡れている。

エマは必死で夜着の裾を引っ張り隠そうとしたが、レオナルドの叱責が飛んだ。

「その醜い体を、自分でもよく見て覚えておけ！」

「レオナルド様が、汚らわしいオメガを見物して下さるというのだ。もつと足を開いてお見せしろ」

「あああっ！」

ドレイクは乱暴な手つきでエマの足首を掴み、大きく開かせた。

「ひやあッ、ッ、ああ……！」

レオナルドに向かって、股間を晒す形になり、エマは羞恥で顔を背ける。

いくらヒートしているとはいえ、軽蔑してくる相手に淫らな姿を晒すのは、耐えがたい屈辱だった。

「はあんつ、あつ……アアツ」

腕で顔を覆いながら、唇を噛みしめる。

レオナールは杯を揺らしながら、ゆったりと椅子にもたれかかり、わざとらしく嘲笑した。

「見ろ、この下劣なさかり具合を」

「ええ。男と見れば、すぐ勃起してよだれを垂らす。さすが平民は違います」

「ハハッ。お前の言うとおりだな。穴はどうだ？」

「物欲しそうにヒクついて、下品な液を滴らせています。レオナール様に抱いて頂けると、勘違いしているのではないでしょうか」

嘲るようなドレイクの言葉に、エマの肩が跳ねる。

侮蔑的な目で股間をジロジロと眺められ、言葉で貶され、エマの自尊心

は深く傷つけられた。

けれど、快樂の熱に苦しむエマには、なすすべがない。

「あんツ……ううツ」

襲ってくる疼きに、エマは自らの雄を慰めようとした。

しかし、嘲りの言葉をぶつける男たちの前で、これ以上の醜態は晒したくない。

伸ばそうとした手を、グツと握り締めた。

「はあッ……はあ、はああッ」

「どうした？　イきたいんじゃないのか？」

エマの様子に気付いたレオナールが、愉快そうに笑う。

「オメガのヒートは、苦しそうだな。体が疼いてたまらないのだろう？」

「あ、……っ」

「どのように慰めるのか、見せてしろ」

自慰をしろと命じられ、エマは震えながら顔を伏せる。

頷かないエマに、レオナルが声を低くした。

「やれ」

「……」

「レオナル様の命が聞けないのか！」

ドレイクが叱責し、怒鳴り声を上げる。

「卑しいオメガが、レオナル様の御前を許されているのだ。早くいつて
見せろ！」

「あッ……んんっ」

かすかに首を振って抵抗を示すと、ドレイクがエマの髪を乱暴に掴んだ。

「あぁっ！」

「命令が聞けぬなら、お前の侍女が折檻を受けるぞ？」

「ッ!？」

ドレイクの脅しに、ハッと目を見開く。

エマの侍女は、まだ二十代の若い女性だ。レオナールに目を付けられたら、酷い目に遭うかもしれない。

「……わ、分かりましたっ」

消え入るような声で答え、エマは目をつむる。

男たちを視界から消して、昂ぶった半身をそつと握りしめた。

「はぁあんっ、アア……んぁぁッ」

長く疼きに耐えていた軀は、刺激に敏感になっていた。

エマが軽く扱いただけで固く張り詰め、あつという間に絶頂へ達する。

「あぁぁぁッ！」

トプツと精が放たれ、エマの手を濡らす。

達した開放感などなく、屈辱で涙をこぼした。

侮辱してくる男たちの前で股間を晒し、自慰を強要され、エマの心はズタズタにされる。

（ううッ……こんな人たちの前で、イクなんて！）

悔しさのあまり唇を噛みしめるが、すぐに嘲笑が響く。

「ハハハ！ イったばかりなのに、もう勃ってるぞ？」

「ッ……ううッ」

「三日は発情すると聞いたが、本当に精が尽きないんだな」

「ヒートしたオメガは、獣と同じです。レオナール様」

「面白いな。もっとイってみせろ」

レオナールの命令に、絶望で目の前が真っ暗になった。

震えていると、ドレイクが冷たい声で促してくる。

「レオナルド様の命令が聞こえなかったか？」

逆らうすべもなく、エマは従うしかなかった。

十
十
十

レオナルドに命じられ、エマは何度も己を慰めた。

イクたびに疼きはおさまるが、昂ぶりを扱くと、また疼きが強くなる。

「ああんッ、……ンンッ」

「手を止めるな。部屋の外にも聞こえるように、声を出してイけ」

「ひうッ……、あんっ、あ、アアアッ！」

命じられるままに、半身を擦り、喘ぎながら達する。

エマにはもう、抵抗する気力など残っていなかった。

軀を苛む疼きから、解放されたい。

理性を焼くような快楽の熱を静めたい。

レオナールの命令に従えば、ひとときの間は、疼きを静めることができた。

「んあッ、あっ、アア」

だが、アルファを受け入れる為の蕾が、ジクジクと疼いてたまらない。

気がつくとき、エマは蕾に自らの指を突き入れ、必死に動かしながら片方の手で雄を扱っていた。

「んッ……うあっ、ああ……んっ、やつ……あ、ああんっ！」

夢中になって指を動かすと、レオナールが愉快そうに笑った。

「おい、見てみる。淫乱が本性を現したぞ」

「卑しいオメガですから」

嘲笑する声に、エマは顔を背けた。

違うと言いたいの、に、快楽を追うことを止められない。

「そうだ。淫乱に相応しいモノがあつたな」

「はい、レオナール様」

レオナールに命じられたドレイクが、またエマの側にやつてきた。

軋むベッドの上で苦しげに悶えるエマを見下ろし、鼻で笑う。

「まったく、下品なオメガだ。レオナール様の慈悲を与えられる光栄に、むせび泣いて感謝しろ」

そう言つて、ベッドに棒のようなモノを放り投げた。

「ッ、こ、これは……？」

初めてみる道具に戸惑っていると、ドレイクが呆れた声で説明する。

「その淫らな穴には、ディルドで十分だろう」

「あッ」

おそろおそろ手に取ると、男性器を模した太い棒であることが分かる。柔らかな感触に安心したが、この太さの棒を蕾に挿れるのだと言われ、恐ろしさに震えた。

「おい、早くやれ」

「さっさとやらないか！ レオナルド様の興がそがれるだろうッ」

「うっ」

ドレイクに怒鳴られ、肩をすくめる。

イキすぎて力の入らない体を叱咤して、何とかディルドを握りしめた。

先ほどまで指で慰めていた蕾へ、先端をそつと入れてみる。

「あつ、んああッ……はああんッ、あんっ」

予想に反し、ズブズブと入っていくデイルドに喘ぎがもれる。

（ッ……きもちわるいっ！）

冷たく無機質な道具に、臍を犯されていく。

嫌でたまらないのに、蕾は絡みつくようにデイルドを締めつけた。

疼く熱が刺激を欲しがって、エマの手は無意識にデイルドを動かす。

「はあつ、んあつ……ううっ、……あつ、うんっ、んんっ！」

指とは比べものにならない刺激だった。

始めは嫌だと思っていたのに、すぐにエマの蕾になじみ、熱を帯びてイイところを突く。

抜き差しするたびに昂ぶりが弾け、再び固く張り詰めて、何度でも果て

てしまう。

「あんっ、ああっ、はあッ……んんっ」

「ふんっ。腰を振って媚びる姿が、様になってるじゃないか」

レオナルルの嘲笑に、ピクツと手が震える。

何度も達したせいで熱が引き、快楽から理性が少しずつ戻ってきたのだ。

レオナルルは酒に酔っているのか、顔を赤らめニヤニヤと笑っている。

ドレイクは側で給仕をしながら、嘲るようにエマを見下ろした。

「レオナルル様。あの卑しいオメガが、だらしなく口を開けてよだれを垂らす様は、犬のようだと思いませんか？」

「ハハッ。言われてみれば、犬だな」

「下の口にディルドを咥えて夢中でイク姿は、発情したメス犬にそっくりです」

「ほう。メス犬か」

「所詮は下賤の生まれ。メス犬と呼ぶ方が適切かと」

ドレイクはエマを蔑みながら、レオナルに進言する。

「あのメス犬は、王族であらせられるレオナル様の種を欲しがっているのです」

「ふんっ。下品で図々しい奴だ」

「はい。身の程をわきまえないメス犬には、むち打ちの刑が妥当ですが、万が一、騒ぎが外に漏れると厄介ですので……」

そう言つて、ドレイクは残酷な笑みを浮かべた。

「オメガは月に一度、ヒートを迎えます。その時に、このメス犬を嬲ればよろしいかと」

「嬲る？ どうやって？」

レオナールが楽しげな声でドレイクへ尋ねる。

ドレイクは、わざとエマに聞かせるように答えた。

「葉は私が管理しておりますので。ヒートの時に、このメス犬を調教するのです」

ドレイクの言葉に、エマは軀を震わせた。

（調教っ!?!）

エマは乱れる息を整えながら、ドレイクを見上げる。

その口から、次々に恐ろしい言葉が飛び出した。

「拘束具で体の自由を奪えば、躰は容易です。鏡の前で自慰をさせれば、己が『聖樹』などではなく、ただの淫らなメス犬だと思い知るでしょう」

「鏡か。それは面白いな」

レオナールがニヤリと笑う。

ドレイクも楽しみに続けた。

「オメガの発情を煽る香を焚き、ペニスを戒めて射精をコントロールするのです。そうすれば、レオナルド様に服従します」

「それも面白そうだが……このような下品なメス犬を飼ったところで、オレに利はあるのか？」

「もちろんです。レオナルド様」

ドレイクが醜悪な笑みを浮かべながら答えた。

「特別なお客様へを招き、見世物として披露なさればよろしいのです」

「おお！ それはいい！」

レオナルドの顔が輝いた。

上機嫌な顔で杯を煽り、ニヤニヤと笑う。

「帝国には、このレベルのオメガは滅多にいないと聞くからな」

「仰る通りです。『聖樹』は我が国の特権ですから。皆が崇める『聖樹』を檻に入れ、淫らに喘ぐ姿を観賞できるとなれば、大金をはずむでしょう」

「ああ。どこの国にも、そういう趣向の奴はいるな」

レオナールは愉快そうに笑い、エマを見下ろす。

「いずれ婚約破棄した後、適当な罪を押しつけ、そのうえで引き取れば、オレの評判も上がる」

「さようでございます。実行には少し時間がかかりますが……罪を犯した元『聖樹』にさえ慈悲を与える王族として、レオナール様は民に称えられるでしょう」

「そしてオレは、賞賛と帝国への強力なカードを手に入れる。そうだな？」

「はい、レオナール様。コレが卑しい平民であろうと、他国の者には分かりません。最終的には、一番高値をつけた貴族に売ってしまえばよろしい

かと」

「お前の案、気に入ったぞ」

「ありがとうございます」

ドレイクが恭しく頭を下げる。

レオナールは満足げに頷き、また酒をあおった。

「ッ……あつ」

エマはデイルドを握る手を止め、二人の会話に戦慄していた。

（殿下は、私を婚約者どころか……同じ人間とすら思っていない）

平民として暮らしていた幼い頃さえ、このように酷い扱いを受けたことはなかった。

「おい、手が止まってるぞ？」

エマの様子に気付いたレオナールが、酒に赤らんだ顔で咎める。

「メス犬のくせに、生意気な目だっ」

「レオナール様を睨むなど、何様のつもりだ！」

ドレイクが声を荒げた。

「あ、そ、そんなつもりじゃ……っ」

「レオナール様。あのメス犬を躰けてもよろしいでしょうか」

「ああ。任せる」

「かしこまりました」

ドレイクはレオナールに頭を下げると、ベッドのエマに近づいた。

その表情は、主人を貶されて怒る従者のものではない。弱者をいたぶることに酔いしれる、邪悪な蛇の顔だった。

「い、いやッ……！」

「この淫らなメス犬め。お前の主人が誰なのか、その躰に思い知らせてや

ろう」

「ひいッ……イヤッ……やめてッ！」

怯え、逃げようとするが、無駄な抵抗だった。

ヒートした躰は、快楽のためなら簡単に理性を手放す。

「はあっ、んあッ……あっ、んあっ、んあぁあぁあっ！」

エマは疼きに呑み込まれ、ディルドで己を慰めながら喘ぎ、身悶える。

命じられるままに痴態を晒し、嘲笑を浴びながら、屈辱と絶望に涙をこぼした。

男たちの侮蔑と嘲笑が去った頃には、エマは身も心もボロボロになっていた。

ベッドの上で、指一つ動かさぬほど疲弊したエマを、温かい腕が抱きしめる。

「エマ様ッ、エマ様っ!!」

「ん……」

泣きじゃくる声に、瞼を上げる。

赤髪を結い上げた女性が、涙を流しながらエマを見つめていた。

「あぁっ！ 気がつかれたのですね!？」

「……ナタ、リナ？」

「はい、エマ様ッ！」

ぎゅうつと抱きしめてくる腕に、ホッと息を吐く。

やっと、地獄のような時間が終わったのだ。

まだ熱はくすぶっているけど、散々吐き出したおかげで、かなりマシになっ

「あっ……ナタリナ」

「エマ様？」

かすれる声で名前を呼ぶと、エマの侍女はようやく体を離れた。まだ涙を流しながら、氣遣うようにエマを見ている。

ナタリナは、エマが神殿に引き取られた時から、侍女として身の回りの世話をしてくれている。

家族同然の大切な人だ。

しっかり者が気が強くて、こんなふう泣きじゃくる姿なんて、今まで

見たことがなかったのに。

（こんな顔させるなんて……きつと、酷い姿なんだ）

それでも、ナタリナの無事が分かって、安堵した。

「……よかった」

「ッ……よくありませんっ！」

ナタリナが泣きながら反論する。

「エマ様にこのような仕打ちをなさるなんて……あんまりです！」

ナタリナは涙を流しながら、再びエマを抱きしめた。

ベッドから起き上がれないエマのために、ナタリナは水差しを持ってきて、少しずつ飲ませてくれる。

カラカラになった喉が潤って、ようやく息も落ちついてきた。

ナタリナがクッションをいくつも重ねてくれたので、それにもたれて

座った。

新しいシートがそつと掛けられ、エマの体を隠してくれる。

ナタリナはベッド横の椅子に腰掛けると、小皿に並べた冷たい白ブドウを一粒つまんだ。

「さあ、エマ様。好きなブドウですよ」

太陽をいっぱいに浴びたブドウは、ツヤツヤとした黄金色だ。差し出されたブドウが、唇に触れる。

「……ん」

口の中に入ってきたブドウを、舌で転がしてゆっくり噛みしめる。

柔らかな甘みが口に広がり、体中に染み渡っていくようだった。

エマの頬がゆるむと、ナタリナは嬉しそうに微笑んだ。一粒、また一粒と、エマの小さな唇に差し出す。

そうして房の半分ほどを食べ終えると、体に少し力が戻ってきた。

「お一人で召し上がれますか？」

「うん」

頷くと、ナタリナは小皿を手渡した。

エマがゆつくりとブドウを食べている間に、ナタリナは洗面器にお湯を張り、柔らかな布を浸して温めると、それを絞ってエマの体を拭き始めた。

汗にぬれた顔を丁寧に拭き、首から胸、お腹から下半身へと、何度もお湯で布を洗いながら、エマの体を綺麗にしていく。

ナタリナはエマの体を清めながら、悲痛の面持ちで口を開いた。

「エマ様。先ほどはお守りできず、申し訳ありませんでした」

「ううん。ナタリナが何もされなくてよかった」

エマは本心から、そう告げた。

ナタリナは、レオナルの命令で部屋から追い出されたのだ。逆らえば、どんな処罰を受けるか分からない。

「エマ様。もう決して、お側を離れませんのでご安心ください！ 二度と、エマ様へ手出しはさせませんから！」

決意を固めた表情に、エマは首を横に振った。

「王子に逆らったらダメだよ、ナタリナ。どんな報復を受けるか分からない」

「私はエマ様の侍女です！ 命に替えても、エマ様をお守りしますっ！」
ナタリナは毅然と言い返すが、エマはレオナルの腐った性根を目の当たりにした。

あの卑劣で傲慢な男の顔など二度見たくないが、婚約者である以上、これからも顔を合わせなくてはいけない。

そして、ヒートがくれば、きつとまた玩具のように弄ばれる。

エマは泣き叫びたい気持ちをこらえ、ナタリナに微笑んだ。

「僕は『聖樹』だから、王子も、僕の体を傷つけることはできないよ」
「ッ……！」

ナタリナが顔を歪めて、エマの手を握りしめる。

聖樹であるエマは、数日に一度、宮廷医の診察を受ける。琥珀の館に入つた「聖樹」に傷一つでも見つければ、それは婚約者であるレオナルルの失態になるのだ。

エマの身体は、王族の子を産むためにあるのだから、レオナルルがどれほどエマを嫌っていても、暴力を振るわれることはない。

安心させるつもりでそう言ったけど、ナタリナは納得できないという顔だ。

「僭越ながら、レオナル王子との婚約を解消するべきだと思いますッ」

「……王命を拒むわけにはいいかないよ」

「あの男は、エマ様に相応しくありません！ 悪行の証拠を揃えて、陛下に陳情することができれば、きっと可能です！」

ナタリナは熱心に語るが、それが困難であることはナタリナ自身も分かっているのだろう。

悔しそうな顔をしているが、意志の強い瞳は決して諦めていなかった。

「本来なら、琥珀の館の主人はエマ様です。それを使用人間の離れに軟禁し、新しい侍女もつけず、食事も使用人と同じ物を運んでくるのですよ！ エマ様への冒瀆です！」

「でもナタリナ。本当のことを話しても、誰にも取り合ってもらえないよ」

「……今は、そうかもしれません」

ナタリナの表情が強ばる。

エマの体を拭く手つきは優しいが、その顔を見れば怒りに耐えているのはよく分かった。

エマだって悔しくてたまらないが、仕方がないのだ。

「ここにいるのは、みんな側妃（そくひ）に雇われた人たちだから。僕たちの行動は、側妃と王子に筒抜けなんだよ」

レオナールの母は、王の側妃だ。

国王には、王妃との間に設けた第一王子がいる。彼は、王太子として立派な人物だ。そして王太子には、すでに跡継ぎとなる幼い王子もいる。

二番目の王子で側妃の子となれば、レオナールが王位を継ぐ可能性は限りなく低い。

だから側妃は、レオナールに王族としての責任や役割を押し付けること

をせず、ひたすら溺愛して育てたという。

その結果、我が儘放題の問題児に育ったという噂を耳にしていたが、ここまでひどいとは思わなかった。

「僕が、王子の婚約者としてちゃんと仕事をこなせば……僕の言うことにも、耳を貸してくれる人が現れると思うから」

「エマ様っ」

「今は、耐えるしかないんだよ」

エマは、自らに言い聞かせるように呟いた。

そう信じなければ、悪魔のような仕打ちに心が耐えられない。

ナタリナは顔を歪めたが、すぐに真剣な顔になる。

「エマ様。メイド達が噂していたのを、偶然聞いたのですが」

そう前置きして、ナタリナは厳しい顔で話してくれた。

「あの男、エマ様と結婚するつもりはないようです」

「えっ？」

「恋人がいるそうです。レーヴェン公爵家のご令嬢、カミラ様です」

「僕より一つ年上の令嬢だったよね。たしか、アルファだって聞いているけど」

「はい。王子とはずいぶん前から親しくされているようで。いずれ側妃に迎えられるのではないかと噂されています」

「側妃に？」

「ええ。それにカミラ様は、社交の場で『王族が聖樹との結婚を強いられるのはおかしい』と、たびたび口にしていたそうです」

「そうなんだ？」

カミラは、かなり度胸のある女性のようにだ。

公爵家という後ろ盾があるからこそその発言だろうけど、王家の制度に疑問を呈するのは、下手すれば不敬罪にもなる。

「僕も、そのしきたりはおかしいとは思ってるけど」

「私もそう思います。カミラ様はあの男と結婚したくて、そのように申したのでしょう。強気な態度に出るのは、公爵令嬢だからと驕っている証拠です」

ナタリナは皮肉な口調でそう言った。

でもエマは、カミラの勇気をすごいと思う。

けれどナタリナにそんなことは言えないので、違うことを口にした。

「さつき、王子が僕と結婚するつもりはないって言ってたけど、そんなことできるの？」

王命による結婚を拒否できる方法があれば、エマも知りたい。

ナタリナは眉間に皺を寄せ、険しい顔で頷いた。

「はい。我が国では、王族は『聖樹』と婚約するしきたりです。婚約後にアルファが産まれた時点で、結婚しますよね」

「うん」

「その婚約ですが、実は制約があるんです。一年の間に『聖樹』が一度も妊娠しなければ、王族から婚約破棄できるのですよ」

「そうなの？」

「ええ。あの男はカミラ様と結婚するために、エマ様には手を出さず、一年後に追い出すつもりなのですよ」

ナタリナの言葉で、ようやくレオナルの言動が腑に落ちた。

たしか「婚約を破棄したら」と言っていたのだ。

だけど、そうなるとエマは不妊の烙印を押されてしまう。アルファを産

めない聖樹など、この国には不要だ。聖樹としての地位を追われることになる。

「あつ……そう言えば、僕に罪を押しつけるって、言ってた」

「まあ！ エマ様を陥れようなどと、許せません！」

ナタリナは椅子を蹴る勢いで立ち上がり、目をつり上げた。手に持っていた布をギリギリと握りしめる。

「よくもエマ様に！」

ナタリナは怒りで顔を赤くしたが、すぐに表情を変え、心配そうにエマを見つめた。

「ああつ、申し訳ありません、エマ様つ。大変お疲れでしたね」

「あ……大丈夫だよ」

「いえ。今すぐ、新しいシートに替えますので、しばらくお待ちください」

ナタリナは洗面器を片付け、エマを長椅子に座らせてから、急いでシーツを取り替える。

テキパキと動くナタリナは、エマにはもったいないくらいの優秀な侍女だ。

もう結婚して子どもがいても良い年頃なのに、エマの側にいるせいで、こんなところに閉じ込められて、窮屈な暮らしを送る羽目になったのだ。（いつか、ナタリナを自由にしてあげなくちゃ）

レオナルとの結婚は絶望的だし、結婚したいとも思わないけど、この先、自分がどうなるのか分からない。

レオナルの陰謀に巻き込まれて、ナタリナまで罪を被ることになったら……それだけは何としても避けたい。

「エマ様、用意ができました」

「ありがとう」

ナタリナの用意してくれたベッドに横になると、乾いたシーツの感触が気持ちよかった。

替えのシーツも摩耗し、ザラザラしている。肌触りは良くないけど、石けんの香りが気持ちいを落ちつかせてくれた。

「エマ様。ベッドの具合はどうですか？」

「大丈夫だよ」

ナタリナが毛布を肩までかけてくれる。

そしてエマの耳元で、優しく囁いた。

「今夜は、ゆっくりお休みください。私が側におりますから、怖いことは何ありません」

「ん……ありがとう、ナタリナ」

ナタリナは微笑んで頷くと、手燭を持ってベッドから離れる。

そして、先ほどエマが座っていた長椅子に毛布をおいた。いつも隣の部屋で休むのに、今晚はエマを心配して、そこで休むつもりらしい。

シンと静まりかえる部屋に、月の光が差し込む。

ヒートの熱も落ちついた。疼きはあるけど、眠れないほどじゃない。

けれど、レオナールが座っていた豪華な椅子が目に入り、先ほどの記憶がまざまざとよみがえった。

「……ッ」

生々しい記憶に、涙があふれ出る。

ぶつけられた言葉も、蔑むような目つきも、はつきりと思い出せる。

悲しくて、つらくて、胸が苦しい。

突然襲いかかった悲劇に、ポロポロと涙がこぼれていく。

(どうして、こんなことにっ)

聖樹は、尊い存在ではなかったのだろうか。

『そなたの役目は、アルファに嫁ぎ、新たなアルファを産むことだ』

大神殿では、そう教えられた。聖樹はアルファを産む存在だから、尊いのだと。

同時に、他国では、オメガは蔑視の対象だとも習った。

聖樹はランダリエ王国の、大事な駒だ。王国内だけでなく、帝国や他国の王侯貴族へ「アルファの世継ぎを設けるため」に嫁ぐことがある。

だからこそ、聖樹にとって嫁ぎ先は重要な関心事であり、エマも初めてのヒートを迎えてからは、未来の夫が誰になるのか、気になっていた。

大神殿で神に祈るときも、伴侶となるアルファが優しい人であることを切々と願った。

そうして、エマの相手が第二王子のレオナールに決まった時は、安堵したのだ。

ランダリエの王族は、代々、聖樹を伴侶とし、大切にしてきたから。それなのに。

婚約者となったレオナールは、エマの出自を蔑み、オメガのヒートをあざ笑い、玩具のように扱ってきた。

ずっと、何度も、神に祈ってきたのに。

「……神様」

（なぜ、こんな仕打ちをなさるのですか？）

問いかけても、答えは返ってこない。

どんなに涙を流しても、胸の痛みは消えず、苦しくて仕方なかった。

第二話 運命のアルファとの出会い

ナタリナが十五歳になる年、幼いエマと初めて出会った。

代々騎士の家系であるケイル男爵家に生まれたナタリナは、男兄弟に囲まれて育ったせいか、結婚したいという気持ちが全くなかった。

だからと言って、騎士になる気つもりもない。

年頃のナタリナには、次々と縁談がやってくるが、心底うんざりしていた。

そこへ「幼い聖樹の侍女にならないか」という話が舞い込んだ。

その聖樹は平民の生まれであり、男子であるという。だから、誰も侍女になりたがらないのだ。

（ろくでもない男と結婚させられるくらいなら、侍女になったほうがましだわ）

小さな子どもの世話をするのは慣れている。侍女とはいえ、難しい仕事ではないだろう。

そうしてナタリナは、うつとうしい縁談話から逃れるために、山奥にあるというイーリス大神殿へ入った。

貴族生まれの聖樹が多い中、平民の、しかも男の聖樹だ。

他の聖樹達からは歓迎されていないようで、ナタリナを前にしたエマは、心細そうにしていた。

歳は五つだという。

だが、ナタリナの生意気な弟とは違って、女の子のように可愛らしかった。

光に輝く金髪と、煌めくような黄金色の瞳。

天使のように愛らしい姿に、ナタリナはうっとりとお惚れたものだ。

「……ぼくの、じじよさんですか？」

侍女が何かさえ分かっていない顔だ。

けれど、ナタリナを窺う瞳が、期待に満ちているのを感じた。

「はい。エマヌエーレ様。このナタリナが、侍女としてお仕えいたします」

「……ぼくと、いっしょにいてくれるの？」

「もちろんです。ずっと、エマヌエーレ様のお側にいます」

「やるも？ かえったりしない？」

「ええ。朝も夜も、ずっと一緒ですよ」

ナタリナが優しく答えると、エマの目が輝いた。

トコトコとナタリナの側にきて、ドレスの裾をぎゅっと握る。

「ぼくも、ナタリナといっしょにいるっ」

掴んだ裾を懸命に握りしめる姿に、胸を締めつけられた。

エマは、両親から無理やり引き離され、神殿に入れられたと聞いている。

その上、他の聖樹からは、のけ者にされているのだ。

ナタリナはその境遇を哀れに思い、同時に、愛らしいエマの側にいられる自分を、幸せだと思った。

（私が、エマヌエール様をお守りしなくては！）

使命感に燃えたナタリナは、固く心に誓った。

幼くして家族と生き別れたエマのために、誠心誠意尽くそうと決めたのだ。

（いつか嫁がれるその時まで、私がこの方の家族になる）

ナタリナの家族が、ナタリナを愛してくれたように。

ずっと側で見守りながら、できる限りの愛情を注いでいこう。

そうしてナタリナは、その日からずっとエマの侍女として側を離れず、心を尽くして仕えた。

純真なエマは、ナタリナの愛情を受けながら素直に育ち、十六歳になった今も、天使のように愛らしい。

そんなナタリナの大切な主（あるじ）が、この寂れた離れの部屋で暮らすようになってから、半年が経った。

エマが第二王子の婚約者選ばれた時は、他国へ嫁がずに済んだと安心したが、レオナルドは最低の男だった。

傲慢で自惚れが強く、自分より下の身分の者には横暴に振る舞う。

婚約者であるエマを平民だからと侮蔑し、いたぶり、虫けらのように扱った。

『平民の分際でオレの横に並び立つなど、反吐が出るわ!』

ことあるごとにエマを罵り、エマがヒートの時期を迎えると、おぞましいやり方で蹴った。

ナタリナはその有様を目の前にしながら、何もできなかった。

一介の侍女が王族に口答えすれば、その場で切り捨てられてもおかしくないからだ。

ナタリナは、怒りに震えながらも、必死に耐えた。

自分の命が惜しかったわけではない。

侍女が問題を起せば、主であるエマが責任を問われる。そして、自分が死んでしまつては、エマを守る者が誰もいなくなってしまうからだ。だからこそ、ナタリナはひたすら耐えた。

(あの男、絶対に許さないッ!)

復讐を誓い、エマには聞かせられないような罵詈雑言を、心の内でレオナルドに浴びせる。

湧き上がる殺意を抑え、エマの前では何とか笑顔を取り繕った。

エマには、レオナルドのことを一瞬でも思い出してほしくなかった。

「エマ様。お湯加減はいかがですか？」

「ちょうどいいよ」

バスタブにゆったりと浸かるエマが、目を閉じたまま答える。

この離れを使っていたのは、上級メイドだったようで、バスタブや洗面所、簡易キッチンに、高価な魔道具を動力とした保冷保温が可能な貯蔵庫もある。

ナタリナは、本館から食事や物資を運んでくる下級メイドと仲良くなり、密かにいろんな物を運ばせていた。

高級な入浴剤に、新品の夜着とシーツに清潔なタオル。新鮮な果物やチーズ、柔らかいパンに調味料など、エマの日常を少しでも明るくしようと心を尽くした。

「湯浴みが済みましたら、食事にあたしましょう。今日は珍しい南国の果物があるですよ」

「南国のって、甘い果物だよね？」

「ええ。たくさん召し上がってくださいね」

「うんっ」

ナタリナは明るい声で話しかけながら、エマの体を丁寧に洗う。

腕を洗っていると、手首にわずかな痣を見つけた。縛られた跡のようで、思わず目をつり上げる。

昨日まではなかったその跡は、あの外道がエマを傷つけた証拠だ。聖樹

を傷つけたことが発覚すれば困るのはレオナールの方なのに、最近是这样して、体に痣を残すことがある。

（あの外道がッ！）

ナタリナは湧き上がる殺意をなだめ、必死に押さえこむ。

代わりに、エマの二の腕を優しくさすりながら、褒め称えた。

「エマ様のお肌はなめらかで、透き通るような美しさですね」

「そ、そんなことないよっ」

「いいえ。エマ様はとても美しいですわ。お肌はすべてですし、御髪（おぐし）も輝くような金髪ではありませんか」

「ふつうの金髪だと思うけど」

エマが濡れた髪を引っ張って、不思議そうに見つめる。

「普通なんていったら、謙遜が過ぎますよ。エマ様」

「でも、そんなたいそうなものじゃないよ？」

「いいえ。エマ様の瞳の色と揃って、美しいですわ」

ナタリナはあらためてエマの顔を覗き込む。

澄んだ黄金色の瞳は、黄水晶が煌めいているようで、目を見張るほどに美しい。

「エマ様の瞳は、神秘的ですわ」

「神秘的？」

「はい。まるで宝石を埋め込んだみたいにな、お美しいです」

「ナタリナ。褒めすぎだよっ」

エマが頬を染めて、小さく呟く。

照れる主人が可愛くて、ナタリナはさらに続ける。

「エマ様の唇も、とても愛らしいですわ。ふっくらして、紅をつけずとも

艶がありますもの」

「もう」

エマは頬を赤くして、プイツとそっぽをむく。

これくらいの賛辞で照れるエマが愛らしい。

（なんて可愛らしい方）

十年以上、侍女として仕えているが、エマは初めて会った頃からずっと可憐なままだ。

男でありながら聖樹となったエマは、神殿に入り神官と共に日々禊ぎを行い、厳しい淑女教育を受けて育った。

ナタリナと二人きりの時は気楽な話し方になるが、教養もあり、礼儀作法も身についている。

けれど、絢爛でありながら陰謀の渦巻く貴族社会は、素直で純粋なエマ

には合わない場所だ。

特に今は、悪魔のような男が婚約者として近くにいます。

辛い現実をひとときでも忘れられるように、ナタリナは熱心にエマの体を清めた。

「エマ様は、誰よりもお美しいですよ」

「ナタリナは僕の侍女だから、そう思うだけだよ」

「ひいき目ではございませんのに」

ナタリナはクスクスと笑って、エマの肌に手を滑らせる。

玉のように光る白い肌は、吸い付くようにしっとり濡れている。

王国では「神の加護の循環期」と呼ばれる、月に一度のヒートの期間。

その時のオメガは、格別に美しいのだ。

愛するアルファを惹きつけようと、匂い立つような美しさを放ち、微笑

み一つで虜にしてしまふ。

（まるで女神のようだわ）

ナタリナは、若き主の体にうっとり見惚れた。

ベータであるナタリナさえ、エマの肢体に目を奪われるのだ。

婚約者であるレオナールが、このしなやかな体を前にしても手を出さずにいることだけは、感心している。

エマに全く興味がないうえに、アルファ用の強力な抑制剤を服用しているのだらう。

それでも、ナタリナの大切な主が、けがされずにいることだけは不幸中の幸いといえた。

「ねえ、ナタリナ」

「はい」

「来月の式典なんだけど」

エマが表情を曇らせて、ナタリナを見上げる。

「陛下の、即位二十周年記念の式典ですね。エマ様は帝国の貴賓をおもてなしするのでしたね」

「うん。帝国からは、皇太子殿下がいらっしやるんだ。二週間は滞在されるみたい」

オスティン帝国とランダリエ王国は、建前上は対等な友好関係にあるが、実際は帝国の属国のようなものだ。

強大な軍事力を誇る帝国へ、金や宝石の原石を定期的に納めることで、周辺国家の脅威から守ってもらっている。

帝国の顔色を窺わなくてはいけない立場で、皇太子を始めとした貴族の接待をするのは、不安でたまらないのだろう。

エマは縋るようにナタリナを見つめる。

「帝国は、オメガ蔑視がひどいって言うでしょ？　いくら聖樹でも、僕はオメガだから……ちゃんと役目を果たせるのになって、心配なんだ」

「エマ様」

ナタリナはいたわるようにエマの髪を撫でた。

きつと大丈夫などと、無責任なことは言えない。

帝国人から見下されることも、召使いのような扱いを受けることも、覚悟しておくべきだ。

そして、レオナルのような下劣な輩がやって来ないことを切に願う。

「エマ様。誰に何を言われようとも、私にとってエマ様は、命よりも大切な御方です」

ナタリナにできるのは、揺るぎない想いを言葉にすることだけだ。

エマの不安が少しでも和らぐように、優しく微笑む。

「さあ、エマ様。先のことより、まずは着替えて、食事に致しましょう」
「……うん」

エマの顔に笑みが戻り、ナタリナも安心して着替えを手伝った。

十
十
十

「おい、ルシアン。その不機嫌な面（つら）をどうにかしろ」

向かいに座る男が、呆れた口調でルシアンを咎めた。

ルシアンは馬車の物見窓から、向かいの男に視線を移動させる。

目の前に座っているのは、ルシアンと同じ年の若い男だ。

漆黒の髪に深紅の瞳。端麗な顔立ちに均整の取れたしなやかな体は、帝国中の令嬢達の憧れの的だ。

しかしルシアンは、彼の容姿には一切興味がない。

彼の身分すら頓着しなかった。

「ティエリー。帝都を出てもう二十日経ったぞ。いつになったらランダリエの王都へ着くんのだ？」

「あと二日もあれば到着するだろ」

「今日には到着する予定だっただろう？」

ルシアンは苛立ったようにティエリーを睨む。

その冷たい眼差しに、ふつうの人間なら震え上がるところだが、ティエリーは楽しげに笑った。

「数日遅れたところで問題はない。式典には間に合う。観光する時間もあ
るぞ」

「馬で飛ばせば一週間で着くというのに……なぜ君と同じ馬車で移動しな
くてはいけないんだ？」

「皇族専用の馬車に同乗しておきながら、不満を言うのはお前くらいだよ、
ルシアン」

「私が乗せてくれと頼んだか？」

ルシアンはしかめ面で、ティエリーをギロリと睨む。

皇太子であるティエリーに対し、不遜極まりない態度である。

通常なら不敬罪で罰せられるが、ティエリーはルシアンの態度を咎める

ことはなかった。

帝国の皇太子ティエリーの学友にして、次席補佐官ダイヤモンド伯爵。

それが、帝国におけるルシアンの立場だ。

月光を思わせる銀の髪は、背中を覆うほどに長く、人前に出るときはいつも一つに括っている。

紅玉のような美しい瞳は、ティエリーの瞳の色とよく似ていた。

「私は一足先に行くと言ったはずだ」

「俺達が早く着くと、不都合があるだろ」

「だから私が先に調査すると言っただろう？」

「お前は目立つから駄目だ」

ティエリーはため息を吐いて、首を横に振った。

「帝国では銀髪も珍しくないが、ランダリエ王国は違う。しがたい小国だ

が、献上される鉱物資源は軍事に欠かせない。もつと慎重に動け」

「分かっている。私が表立って動くことはしないが……直接、情報を集めておきたかったんだ」

「社交嫌いのお前が、夜会に参加すると?」

「それ以外にも方法はある」

からかうような声に、ルシアンは顔を歪めた。

ルシアンもティエリーに劣らぬ美男子だが、色事には興味ない。

必要なら、相手が誰であつても甘い台詞を囁き、口説き落とすことができるが、どんな美女を抱いたところで、満たされることはなかった。

「なあルシアン。お前もそろそろ、番を持ったらどうだ?」

「なぜそういう話になる?」

「二十五にもなつて、番の一人もいないアルファは、お前くらいだぞ」

ティエリーは軽い口調でそう言うが、その目は友人を心配していた。

ルシアンはアルファでありながら、今まで番を持たず、発情期さえ抑制剤で乗り切っている。

ふつうのアルファは、発情期が来ると番のオメガを抱くか、アルファ専用の娼館で事を済ませる。娼館にいるオメガは常に避妊薬を飲んでいるので、もし子ができたとしても、娼館側で処理する手はずになっているのだ。

ルシアンが娼館を利用しない理由は、ティエリーにも分かる。

冷酷無比で恐れられるルシアンだが、実は「オメガ」に対してだけは、その非情ぶりを発揮できないのだ。

オメガを憐れむ心があるのに、かたくなに番を持つとしないのは矛盾に思えた。

「私に、番は必要ない」

「必要あるだろ。一度くらい、オメガを抱いてみたらどうだ？」

「番にしてやれないのに、抱くのは可哀想だろう」

「抱いたら番にすればいいだろ？ お前なら、番が何人いても養えるだろうに」

ティエリーが呆れた顔になるが、ルシアンは眉をしかめただけで、答えなかった。

（オメガは、たった一人の番しか持てないというのに）

貴族が正妻以外に愛人を持つのが当たり前のように、アルファが複数のオメガを番にするのも、当たり前のことだ。

帝国の常識ではあるが、それだけは、どうしても馴染めない。

「ルシアン。ランダリエには、素晴らしいオメガがいるそうだが」

ティエリーはルシアンが番を持つことを諦めていないようで、にこやか

に話しかける。

「聖樹と呼ばれる、特殊なオメガだ」

「知っている。アルファを産むという触れ込みで、政略結婚させているの
だろう」

ランダリエは金や宝石の産出で有名だが、聖樹と呼ばれるオメガを高値
で方々に売りつけている。

ルシアンから見れば、ただの人身売買だ。

ティエリーは肩をすくめただけで、王国の立場を擁護した。

「それでもいいだろ？ 結婚商売ってのは、いかに価値を高めるかが重要
だ。ランダリエは、金の卵を産むガチョウを大切に育てているだけだ」

「……」

「実際、王族も貴族もアルファの跡継ぎを欲しがる。先代皇帝の側室も、

ランダリエ産だったな。彼女の産んだ子はアルファばかりで、私も感心したものだ」

ティエリーの言葉に、ルシアンはますます眉間にしわを寄せた。
オメガを家畜扱いするのは、帝国では当たり前の風潮だ。

もつとも、ティエリーにとっては、貴族も平民もオメガも等しく駒ではない。

その証拠に、ティエリーは悪巧みの笑みを浮かべてルシアンを見た。

「ルシアン。王族の妻になった聖樹は、ただの飾りじゃない。妃として政治にも携わる」

「……それで？」

「お前が手懷けて、情報を探れ」

「……」

「オメガはアルファに逆らえないだろ？ お前の女にしてしまえば、簡単に言うことを聞く」

「この私に、色仕掛けをしろと？」

ルシアンは怒りを露わにし、ティエリーを鋭く睨みつけた。

「お前が適任だ」

「王妃や王子妃に、そう簡単に接触できるわけではない」

「一人、ちょうど良い相手がいるだろう？」

「……まさか、第二王子の婚約者のことか？」

ルシアンの問いに、ティエリーは笑顔で頷いた。

さすがにルシアンも声を荒げる。

「子どもに手を出せと言うのか!？」

「もう成人してるだろ。たしか十六だったな」

「十分子どもだ！」

「いいじゃないか。恋に浮かれる年頃だ。お前が甘い声で愛を囁けば、簡単に落ちる」

ティエリーは楽しそうに答えるが、目は笑っていない。

本気で言っているのだ。

ルシアンは舌打ちして、窓の外に視線を移す。

（確かに、情報を得るには適した方法だ）

実行するのがルシアンでなければ、喜んで賛成した。

しかし、オメガを駒にすることには抵抗がある。

「難しく考えるな。帰国すれば二度と会うこともない。後腐れなく遊べる相手だと思って割り切れ」

ティエリーの無責任な言葉に苛立ち、ルシアンは返事をしなかった。

十
十
十

ランダリエ国王の即位二十周年記念式典には、諸外国から貴賓が訪れる。その応対をエマがほとんど任されることになったのは、二ヶ月前のことだった。

第二王子の婚約者という立場に加えて、レオナールがやるべき仕事をエマに全て押しつけてきたからだ。

「帝国の皇太子は、兄上が応対するそうだ。他の貴族は貴様がもてなせ」

レオナルは一方的に命令し、エマをきつく睨んだ。

「いいか。兄上に劣らぬほど完璧にもてなし、オレの評判を上げるんだ。間違っても、オレの顔に泥を塗るなよ？」

「……かしこまりました」

命令に逆らえるはずもなく、エマは一人で準備をする羽目になった。

ナタリナが本館のメイドを捕まえて聞いたところによると、レオナルは皇太子の応対を任されなかったことに腹を立てて、国王の叱責を受けたと言う。

エマと二人で、訪れる帝国貴族をもてなすよう言われたそうだが、レオナルが従うはずもない。

「陛下は本気で、あの男が真面目に務めを果たすと思っているのでしょ

か？」

「ナタリナ。そういうことは言つたらいけないよ」

「誰も聞いておりませんわ」

ナタリナはそう言つて、悪口を止めない。

「全く、忌々しいこと！　ここへ剣を持ち込めるなら、今すぐ叩き斬つてやりたいくらいですわ」

ナタリナは時々、物騒なことを言う。

「ナタリナ」

「冗談です。エマ様」

微笑むナタリナに、エマもそれ以上は咎めなかった。

誰にも聞かれてないことを確かめた上での発言だし、エマ自身も、レオナルがいなくなればいいのにと常々思つていたからだ。

そうしてエマは、一人で準備に奔走することになったが、意外にも手助けしてくれる人が現れた。

王太子のダリウだ。

レオナルルの兄で、エマより十歳年上の彼は、聡明で温厚な人柄に加え、剣の腕も王国随一と名高い。臣下や国民からの信望も厚く、誰もが次代の国王に相応しいと認める人物だった。

もともと、その名声を快く思わない貴族もいる。側妃の実家であるノワジエール侯爵家だ。レオナルルの祖父に当たる侯爵は、王太子に対して好意的とは言いがたく、エマのこともよく思っていないようだ。

その事情を知っていたからなのか、エマがレオナルルの秘書官から大量の仕事を渡され、途方に暮れていたときに、王太子は手を差し伸べてくれた。

南殿（なんでん）にある王太子の執務室に呼び出された時は緊張したが、王太子は応接ソファに腰掛け、テーブルに積み上げられた資料を手にしたままエマに座るよう促した。

「エマヌエーレは、王室主催の行事を担当するのは初めてだったな」

「はい」

「困ったことがあれば、私に相談してくれて構わない」

「あ、ありがとうございますっ。ダリウ殿下」

王太子は寛大な方だった。

弟の婚約者にすぎないエマにも、名前で呼ぶことを許してくれた。未だに、エマに名前を呼ぶことを許さないレオナルとは大違いである。

「忠告しておくが、レオナルや秘書官には、相談しない方がいい。あれは昔から実務に疎くてな。今まで重要な行事を任されたことがないのだ」

「そうなのですか？」

「ああ。今回もせっかくの機会だというのに、大方、皇太子の応対を任せられなかったことに拘ねているのだろうか？」

「それは……」

王太子の推測通りだが、正直に答えるのはばかれる。

エマは一応、レオナルの婚約者だ。どんな時でも、レオナルを立てなければならぬ。

「よい。レオナルの性格は把握している。分からぬことがあれば、私の秘書官に直接尋ねると良い。もしレオナルに何か言われたら、私の命令だと答えて構わぬ」

「ダリウ殿下のお心遣いに、感謝いたします」

エマは心から感謝の言葉を述べた。

王太子とレオナールは、同じアルファで兄弟なのに、なぜこうも違うだろう。

エマがあと十年早く生まれていたら、もしかしたら、レオナールではなく、王太子の妃に選ばれていたかもしれないのに。

（ダリウ殿下なら、僕が平民でも、あんな非道なことはなさらない）

レオナールは、エマを脅かす存在だ。

そして式典に訪れる帝国の貴族もまた、エマにとっては気がかりな存在だった。

「あの、ダリウ殿下」

「どうした？」

「帝国の方々は……私のもてなしを、不快に思われたりしないでしょうか？」

「オメガであることを気にしているのか？」

察しのいい王太子は、エマの不安を見抜き、安心させるように微笑む。

「確かに、他国にはオメガを軽んじる風潮がある。だが、祝いの席で外交官がそのような振る舞いをするのではない。まして、王子の婚約者に無礼を働けば、責を問われるのはあちらだ」

王太子の言葉に勇気づけられる。

もしレオナルドみたいな人間がいたらと考えると、恐ろしかったからだ。

安堵するエマに、王太子は厳しい顔をした。

資料をおき、室内にいた部下達を全て下がらせる。

人払いをしたということは、重要な話をされるのだ。

エマは背筋をただして、身構えた。

「エマヌエーレ。皇太子には、十分に気をつけるように」

「皇太子殿下に、ですか？」

「ああ。オスティン帝国の皇太子は、皇帝に次ぐお方だ。我がランダリエ国王よりも、国際的な序列では上位にあたる。殿下のご意向には、我々であつても逆らえぬ」

王太子は眉をひそめ、エマを見つめた。

少し躊躇ったのち、厳しい顔のまま告げる。

「いいか、エマヌエーレ。……万が一、皇太子から夜伽を命じられても、そなたは断れぬ」

「え……？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

夜伽とはつまり、皇太子と閨を共にするということだ。

「公の場で求められることは、まずない。私がその場にいれば、断れるよ

う取り計らう。だが、もしそなた一人の時に命じられたら、謹んで受けよ」

「ですが……私はレオナル王子の婚約者です」

王族の婚約者を夜伽に召すなど、普通では考えられない。

王太子は哀れむようにエマを見つめた。

「皇太子は、それほどまでに強い権限をお持ちだ。明確な理由があれば異議を唱えることもできる。だが、それ以外であれば……我が国とて、おいそれと逆らうことはできぬ」

その言葉で、エマはすべてを悟った。

「……私がオメガだから、受けねばならないのですね」

「そうだ」

ダリウは苦しげに頷いた。

エマは、奥歯を噛みしめる。

もしエマが、アルファかベータであつたなら、ランダリエは非情な命令だと抗議するだろう。

「帝国のオメガは、娼婦と変わらぬ。同時に、我が国の『聖樹』は特別だ。皇太子が特別なオメガとして『聖樹』を所望した場合、受けねばならん」
王太子の言葉に、エマはうつむいた。

聖樹は、王家の所有物だ。外交のカードとして使われるのは、当然のこと。

国のために、王家のために、道具として扱われるのが定めだと分かっていたけど、目の前に突きつけられると、恐ろしくて仕方なかった。

「今残っている『聖樹』で、皇太子の夜伽を務められる年齢の者は、そなたしかない。そして、そなたはまだ正式な妃ではない」

王太子が続けた言葉に、愕然とした。

まさしく、その通りなのだ。

エマがレオナールの婚約者選ばれたのも、年齢の釣り合う聖樹が他にいなかったから。もう一人、歳の近い聖樹がいたが、彼女はすでに他国の王族へ嫁いだ後だった。

そして、王太子夫妻には、子が三人いる。王家の血筋を残す意味でも、エマは必要ない。

ただ、しきたりによって、王子の婚約者選ばれただけ。

「エマヌエーレ。万が一の話だ。だが、覚悟はしていてくれ」

「……かしこまりました。ダリウ殿下」

拒否などできるはずがない。

聖樹として育ってきたエマは、王家に忠誠を誓う身だ。

たとえ捨て駒だと言われても、従うしかなかった。

＋
＋
＋

ルシアンとティエリーを乗せた馬車は、二日後にランダリエの王都へ到着した。

その翌日、王宮では帝国皇太子一行を迎えるための公式謁見が設けられた。

ルシアンは、ティエリーの提案を承諾したわけではない。

今日の謁見にも皇太子の側近の一人として列席するだけで、国王をはじめとする王族への挨拶が済み次第、本来の仕事に取りかかるつもりだった。謁見が行われたのは、王宮にある「黄金の間」である。

その名の通り、天井から壁、床に至るまで、惜しみなく金の装飾が施された広間だった。ランダリエの特産の一つである金をふんだんに用い、国の豊かさを示しているのだろう。高い窓から陽が差し込むと、部屋全体が淡く金色に輝いて見えた。

「皇太子殿下。ようこそランダリエへお越しくださいました」

四十半ばの国王夫妻、ルシアンたちと同じ年頃の王太子夫妻、そしてまだ十代の第二王子とその婚約者が揃い、帝国の一行を出迎えた。

腰を低くして歓迎の意を表す王族側に、皇太子も如才なく応えている。

王妃と王太子妃も聖樹だと言うが、普通の貴婦人のようにだ。華麗なドレ

スに身を包み、おしろいをはたき、生まれ持った美貌を磨いて、美しく着飾っている。

男達も、王族に相応しい絢爛な礼服を身に纏っていた。

その中で、一人だけ白い服に身を包む者がいる。

聖樹用の礼装だという純白の法衣は、華奢な体を柔らかく包み、清楚で可憐な花を思わせた。

金色の髪は肩にも届かぬ短さだが、左右の横髪を緩やかに巻いて垂らし、ており、少女と見間違ふほどの美しさだった。

王族の挨拶が順に進み、列の最後に控えていた可憐な白い花が、ティエリーの前に進み出た。

両手を胸の前で重ねて、軽く膝を折る。

「帝国の若き太陽、皇太子殿下にご挨拶いたします」

鈴が鳴るような可愛らしい声が、ルシアンの鼓膜を震わせた。

白い花は優雅に一礼し、頭を下げる。

「エマヌエーレ・イーリスと申します」

「うむ」

ティエリーが尊大に頷くと、エマヌエーレと名乗った可憐な花は、ホツとしたように唇を緩ませた。

ゆつくり顔を上げたその瞳が、ルシアンを捉える。

黄金色の、煌めく宝石のような瞳。

ルシアンは、その美しさに思わず見惚れた。

「あ……」

ルシアンを映した瞳が潤み、慌てたように瞼を伏せる。

「ッ!？」

ドクンツと心臓が跳ねた。

思わず息を呑む。急に、体が昂ぶってきた。

鼓動が速くなり、可憐な花から目が離せない。

その場にいる他の存在を忘れ、惹きつけられるようにエマヌエーレを見つめた。

ティエリーに促されて自己紹介した時も、どのように挨拶したのか覚えていない。

「ルシアン・デイモンドと申します」

表面上は冷静さを保ちながら、ルシアンは驚愕していた。

（ランダリエのオメガは、特殊なのか？）

初めての衝撃に戸惑うが、平静を取り戻すのは早かった。

静かに深呼吸をして、体を落ち着かせる。

（オメガのフェロモンに当てられたのか？）

おそらく、エマヌエーレは発情期に近いのだろう。

油断していたから、つい当てられただけだ。

ルシアンはそう判断し、気を引き締めた。

今朝は、念のために抑制剤を服用してきたので、これ以上は煽られることもないはずだ。

ルシアンはいつも通りに、礼節を失わぬ穏やかな微笑みを浮かべた。

謁見が滞りなく終わると、国王と王妃、王太子妃が先に退出した。

以後の式典に関する打ち合わせは、王太子と第二王子が対応すると聞いていたが、ほどなくして第二王子の部下が慌ただしく入室する。

報告を受けた第二王子は、「急用ができた」と言い残し、どこか嬉々とした様子で広間を出ていった。

事前に目を通していた調査書の通り、無能な王子に違いない。

王族側で残ったのは、王太子とエマヌエーレだけだった。

さっそく式典の打ち合わせに入ろうとした、その時である。

ティエリーが、何の前触れもなくエマヌエーレへ声をかけた。

「イーリス殿。式典の打ち合わせは、デイモンド伯としてくれ」

「えっ？」

「私は、ダリウ殿に用があるのだ」

ティエリーは穏やかな笑みを浮かべたまま、王太子へと視線を向ける。

王太子も驚いた様子だったが、すぐに了承した。

名指しされたエマヌエーレが、不安げな顔で王太子を見る。

王太子が頷いたのを見て、エマヌエーレはきゅつと唇を引き結んだ。

「かしこまりました。皇太子殿下」

エマヌエーレは緊張した面持ちで、頭を下げる。

ティエリーは満足そうに頷き、ルシアンを振り向いた。

「後は任せたぞ、デイモンド伯」

「はい、皇太子殿下」

ルシアンが頷くと、ティエリーは笑顔でルシアンの肩を軽く叩き、小声で囁いた。

「手懷けておけ」

「……善処します」

気は進まないが、ティエリーの命令だ。

さりげなく手渡されたのは、避妊薬の粉薬。最初から、ルシアンとエマヌエーレを二人きりにさせるつもりだったのだ。

ティエリーがダリウを伴って退出すると、控えていた書記官や儀礼官た

ちも、エマヌエーレへ必要な資料を預け、席を外した。

扉が閉ざされ、黄金の間に残されたのは、ルシアンとエマヌエーレだけになる。

「デイモンド伯爵。僭越ながら、私がご案内いたします」

エマヌエーレは優雅に一礼するが、よく見れば、小さく震えている。

ルシアンを窺う瞳は、怯えたように揺らぎ、ひどく警戒していた。

（私を怖がっている？）

こんな反応をされたのは初めてだった。

ルシアンは容姿端麗で、令嬢や貴婦人に圧倒的な人気がある。そのうえ、アカデミーを首席で卒業した優秀なアルファだ。

羨望や嫉妬を向けられることはあっても、初対面で怯えられたことは一度もない。

（私が何をしたと言うんだ？）

焦燥に駆られながら、ルシアンは優しく微笑む。

「イーリス殿。私のことは、ルシアンとお呼びください」

「お、お名前をお呼びするわけには参りませんっ」

エマヌエーレがブルブルと首を振る。

陶器のような白い顔が、だんだんと蒼ざめていくのを見て、さすがに焦った。

「では、私がお名前でお呼びしても？」

「は、はい、構いませんっ」

「エマヌエーレ殿」

「エマとお呼び捨て下さいっ。デイモンド伯爵」

必死に答えるエマヌエーレの声が、泣きそうになっている。

端から見れば、ルシアンが彼をいじめているように見えるはずだ。

これでは、打ち合わせどころではない。

（エマヌエーレ殿……いや、エマの緊張を解かなくては）

ルシアンはその場に片膝をつき、エマを見上げた。

「ッ!? お、お立ちくださいッ！」

「エマ殿が、私をルシアンと呼んで下さるなら」

「そ、そんな……っ」

エマが困惑した顔でルシアンを見下ろす。

長いまつげが濡れ、瞳が潤んでいる。

祈るように両手を握りしめる姿は、敬虔な巫女のようなだった。

ふつくらとした薄桃色の唇は、ついはみたくなるほど魅力的で、ルシアンは自分が興奮していることに気付く。

自然と、令嬢を口説くときのように、甘い声で囁いた。

「エマ殿。私は貴方と親しくなりたいのです」

「え……？」

「美しいものを愛するのは、紳士の嗜み。どうか、貴方の麗しい声で、私の名を呼んで頂けませんか？」

「ッ……」

エマの顔が真っ赤になり、動揺した様子で瞬きをする。

ルシアンはエマの組んでいた手をほどき、左手を優しくつかみとった。

真珠のように光る、なめらかな白い肌。

思わず口づけたくなるほど、美しい手だ。

ルシアンは、エマの手を扇情的な仕草で撫で上げた。

「んうッ……あつ」

ぴくん、と震える手が愛おしく、ルシアンは口端を上げる。

そして、ゆっくりと甲にキスを落とした。

「あッ、で、デイモンド伯爵ッ」

「ルシアンとお呼び下さい」

甲に唇を触れさせたまま、上目遣いにエマを見る。

エマは右手で胸元を押さえながら、頬を赤く染め、涙を浮かべていた。初心な反応に、高揚感を覚える。

ルシアンは薄く唇を開き、舌でぺろりと甲を撫でた。

「ひぁあんっ」

ビクンッとエマの体が震え、慌てて口を覆い隠す。

エマの甘い声に、笑みが浮かぶ。

ルシアンはさらに、手の甲から指先へと、舌でペロッと軽く舐めていく。

「ひゃんッ！ あ……だ、ダメですっ」

「エマ。どうか、ルシアンと」

「んああっ……アッ、る、ルシアン、さまあ……ああっ」

甘い刺激に耐えきれなかったのか、エマはとうとう降参した。

名を呼ばれたことに満足して、ルシアンはようやくエマの左手を離した。

「ん、っ……ルシアン、様」

「エマ。怯えないで下さい」

ぽろ、と涙をこぼすエマに、優しく微笑んだ。

ハンカチを取り出すと、エマの左手を丁寧に拭う。

「る、ルシアン様っ」

「大丈夫ですよ、エマ」

ルシアンは立ち上がり、エマの頬をそつと撫でる。

戸惑うエマに、優しく言い聞かせる。

「最初に言つたでしよう？　美しいものを愛でるのは紳士の嗜み。これは私の挨拶のようなものです」

「あ、あいさつ……？」

「貴方はまだ若いようですから、世間をご存じないのでしょうか。これは、婚約者への裏切りではありませんよ」

「あつ……ほ、本当ですか？」

「ええ」

ルシアン的微笑みに、エマはホッと息を吐く。

素直に信じる姿を見て、良心が咎めた。

同時に、エマの状況を把握する。

番のいるオメガが、他のアルファに反応することはない。

だが、エマはルシアンとの接触を拒まず、それどころか甘い声を上げ感じていた。

（エマは、まだ誰とも番っていない）

すでに第二王子の番になっている可能性もあったが、これならルシアンに勝算がある。

（情報を聞き出すくらいはできるだろう）

オメガを利用するのは心苦しいが、ティエリーの命令を無視するほうが厄介だ。

それに、正直に言えば、エマの初心な姿にそそられてしまった。

（私も、所詮アルファというわけか）

魅力的なオメガを前にして、興味のない振りはできない。

この手で乱れる姿を見たいと、本能が訴える。

「あの、ルシアン様？」

エマは頬を薔薇色に染め、ルシアンを見上げる。

その唇に口づけたくなるが、急に近づけば、逃げられてしまう。

「エマ。会場を案内してくれますか？」

「はい、ルシアン様」

エマが嬉しそうに頷く。

さつきまでの怯えた様子はなく、ルシアンへの警戒を解いてくれたよう
だ。

「ルシアン様。こちらです」

エマの案内で、ようやくルシアンは式典の打ち合わせを始めることがで
きたのだった。

十
十
十

謁見と式典の打ち合わせを終え、自室へ戻っても、エマの胸はまだドキドキしていた。

「エマ様。先に湯浴みになさいますか？」

「うん」

「では、準備してまいりますね」

「うん」

ナタリナの問いかけにも上の空で返事をする。

ベッドに腰掛けて、左手を眺めながら頬を赤くした。

（ルシアン様……素敵な方だったな）

ひんやりした手が、エマの手を包むように握りしめ、薄い唇が甲に触れた。

ルビーのような美しい瞳がエマを映して。

柔らかな眼差しで、微笑んでくれた。

『エマ』

耳元で囁く声に、体中が熱くなってくる。

「んっ……はあ……あっ」

自然と右手が下半身に伸びた。

緩く勃った半身から、熱いものがあふれ落ちる。

「あんっ、だ、ダメ……っ」

ルシアン の口づけを思い出すと、牀の奥が疼くのだ。

無意識のうちに、裾をはだけて昂ぶりへ手を這わせる。

「はあんっ、あ、ッ、あああっ！」

軽く扱いただけで、とぷりと白濁が放たれた。

達したことで熱は落ちついたが、蕾はイヤらしくひくつき、アルファを欲しがっている。

「ああっ……どうして？」

初めて会った人だ。

挨拶だと言って、この手に軽く触れただけなのに。

（ルシアン様っ）

また、あの冷たい唇に触れてほしい。

手だけでなく、この体すべてに。

グズグズと疼く蕾を、あの指で慰めてもらえたら……。

「ンッ……だめっ」

エマはぎゅつと目をつむり、首を振った。

はしたない欲望を必死に押さえ込み、シーツを握りしめる。

「あの方が、慣れていらしたから」

ルシアンは色事に慣れているから。

そして、アルファだから。

エマのように経験のないオメガは、簡単に欲を煽られるのだ。

エマは自分にそう言い聞かせ、疼く熱を振り切った。

それに、抑制剤をしつかり飲んでいれば回避できたはずだ。

レオナルドに取り上げられた抑制剤は、今回の式典と貴賓のもてなしの

ために、数日分だけ渡してもらえた。

だが、今まできちんと服用していなかったたので、効き目が弱くなっている。

「最初から、王子が引き受けてくれたらよかったのに」

エマはベッドに横になると、恨めしく呟く。

けれど、思い出すのはルシアンの姿ばかりだ。

式典の準備を始めたころ、王太子から恐ろしい未来の可能性を突きつけられて、ずっとゆううつな日々を過ごしてきた。

皇太子一行が到着したあと、神に祈るような気持ちで公式謁見に列席したのだ。

帝国の皇太子は、その名にふさわしい風格と品格を備えた、立派な人物だった。

けど、鋭い目つきがエマには怖かった。

（どうか、目を付けられませんように！）

必死に祈りながら、挨拶をした。

そして、顔を上げた瞬間。

初めてルシアンの姿に気づいた。

「……！」

皇太子の後ろに控えた、銀髪の男性。

ルビーのように煌めく紅玉の瞳は美しく、端麗な顔立ちに思わず見惚れた。

（うわあつ、素敵な人）

長い銀髪を一つに結んだ姿も、凜々しかった。

デイモンド伯爵と名乗った彼に胸がときめいたが、皇太子の眼がエマを

捉える。

彼によく似た赤い瞳は、血を思わせる深紅色で、ゾツとした。

皇太子はエマを見つめたまま、うつすらと笑みを浮かべたのだ。

「ッ!？」

好奇の眼差しに、心臓がドクンドクンと早鐘を打つ。

公の場で夜伽を命じることはないだろうが、何を言われるのか。

緊張しながら身構えていると、皇太子は意外なことを言い出した。

「イーリス殿。式典の打ち合わせは、デイモンド伯としてくれ」

「えっ？」

エマが戸惑っているうちに、皆が黄金の間を出て行く。

ルシアンと二人残されたエマは、彼が帝国人であることを思いだして、

震え上がった。

帝国の貴族は、オメガを奴隸のように扱う。

公の場では友好的に見せても、エマの前では態度を豹変させるかもしれない。

（機嫌を損ねたら、どんな仕置きをされるか！）

レオナルドの非道な仕打ちを受け続けたせいで、エマは酷く怯えたのだ。けれど、ルシアンはとても優しかった。

エマがオメガだと知っているのに、軽蔑や侮蔑の眼を向けることもなく、微笑みかけ、甘い言葉を囁いた。

優しい声と眼差しで、エマの手にキスをして……。

（ルシアン様）

彼の姿を思い出すだけで、胸が高鳴る。

式典は二日後。その後も、皇太子一行は一週間ほど滞在すると聞いてい

る。

（また、あの方に会えるんだ）

そう思うと嬉しくて、ルシアンに心惹かれていくのを止められなかった。

ダイジェスト1

ナタリナが隣の部屋へ移動すると、ベッドにはエマ一人になった。
「これを……中に挿れるのかあ」

手のひらに乗せた小さな丸い玉を見つめ、ゴクリと息を呑んだ。

ベッドの上に座り込み、夜着の裾をめくりあげる。

両足を広げ、股間を空気にさらすと、ひんやりした外気にピクリと震えた。

蕾に左手を伸ばして軽く触れると、花が開くように盛り上がっている。

循環期ほどではないが、やはりその時期に近いのだと思った。

「あ、熱いっ」

指で触れただけで、蕾がひくつく。

エマは、ゆっくりと人差し指を中に差し込む。

「んんっ、あ、アッ」

すぐにトロトロと愛液があふれてきた。

「んああ、ッ……はあんっ」

指を飲み込んだ蕾が、きゅっと締めつけ、欲しがるようにうごめく。

敏感な蕾は、指で触れるだけで気持ちいい。

中を掻き回したくなるが、エマは右手に静香石を持った。

「あんッ」

蕾の入り口にあてただけで、感じてしまう。

敏感な牝に戸惑いながら、少し奥へと押し込んだ。

「アッ……ん、んああっ！」

慎重に挿入するつもりが、蕾はあっけないほど簡単に、静香石を飲み込んだ。

「ッ、あッ、ひああんっ」

蕾を押し広げ、スルツと入ってきた冷たい感触に、体を震わせる。無機質な魔道具だが、痛みもなく、すぐに蕾に馴染んできた。

「あああんっ、……はあ、はあっ」

静香石を飲み込んだ蕾は、悦ぶようにギューギューと締めつける。腰が甘く疼き、エマは無意識に半身を握りしめた。

半勃ちになった雄を、上下に抜き出す。

「はあっ、アア、ッ……ひやああッ！」

あっけなく弾けて、股間が濡れた。

だけど、いちど果てただけでは、熱がおさまらない。

エマは脚を開いたまま、快楽に追われるように、夢中で昂ぶりを扱いた。

「ひゃあんっ、ああ、あんっ、アアアッ！」

ビクビクと軀を震わせ、三回ほど達したところで、ようやく理性が戻ってきた。

「うう……っ」

循環期よりマシとはいえ、抑制剤の効き目が悪いせいで、快楽に思考を奪われてしまう。

ベタベタに濡れた股間を見下ろし、エマは唇を噛んだ。

ダイジエスト2

夜空の月は、あと数日で満ちる。そのためか、月の光は驚くほど明るく、王宮の夜を照らしていた。

エマが周りの様子を窺うと、そこは薔薇の生け垣に囲まれた、小さな空間だった。

汗がしたたり落ちるほどの熱に、息を乱しながら耐えた。だんだんと強くなる疼きに、エマの半身は緩く勃ち上がる。

「ああつ、ん、んんっ」

エマは無意識に、法衣の裾を掴んでまくり上げた。

礼装の下には、肌着としてリネンのシュミーズを着ている。膝丈まであ

るそれをめくると、エマの股間は外気に晒された。

「ッ……んっ」

夜の庭園で月に見下ろされながら、エマはそつと昂ぶりを握りしめた。

「はあんっ、あ、ああっ」

牀の熱を静めるには、こうするしかない。

誰もいないとはいえ、外で淫らな行為に耽るなんて、エマには耐えがたい羞恥だった。

「ああっ、……あんっ、あああっ！」

身を丸めながら、必死に雄を扱いた。

蜜がトロトロとあふれ、蕾は悦ぶように収縮する。

半身を弄るだけでは、きつと足りない。

(どうしようっ)

どうすれば、この熱が満たされるのか分からない。

「はあんっ、アアッ」

雄を扱きながら、涙を滲ませて喘ぐ。

持て余す熱に、泣きそうになった、そのとき。

「ああ。ここにいたのですね」

「え……?」

聞き慣れた声に、ハッとした。

視線を向けると、先ほどまで一緒にいたルシアンが姿が見える。

「あッ……!」

「金の薔薇……いえ、薔薇の精霊ですね」

ルシアンが、優しい声で近づいてきた。

月の光に透ける銀髪は煌めき、紅玉の瞳が、エマを甘く見つめる。

月の化身かと思うほど美しい姿に、釘付けになった。

「エマ」

ルシアンがエマに覆い被さり、吐息が触れるほど近くなる。

「!!」

眼前に現れた憧れの人に、心臓が飛び出しそうになった。

鼓動が速まり、頭の中が真っ白になる。

「なんて甘い香りだ」

その囁きで、むせかえるような香りに包まれていることに気付いた。
薔薇だけではない、濃密な香り。

（あ……僕、フェロモン？）

初めての香りに混乱していると、ルシアンが甘く囁いてくる。

「このままでは、苦しいでしょう？」

「ッ、んんっ、あ、あああっ」

ルシアンの手が、襟元のボタンを一つずつ外していく。
抵抗しようとしたが、ルシアンにたしなめられる。

「私に任せて」

「あんっ」

体に力が入らず、されるがままに法衣を脱がされた。

汗でびたりと張り付くシュミーズも、ルシアンの手によって胸元までは
だけられる。

ひんやりとした空気が肌に触れて、心地よかった。

「やあつ、だ、ダメですっ」

「貴方の服が汚れますから」

優しく言い聞かせる声に、自然と従ってしまう。

訳も分からぬうちに、肌着姿にされ、ルシアンのお金を下敷きにして、その身を横たえていた。

理性が残っていたなら、客人の礼装を汚すような恐ろしい真似はできなかったはずだ。

だが、ヒートに近い状態のオメガが、アルファに逆らえるはずがない。

「ああんつ、やあつ、アア！」

ルシアンのお金の手が、エマのお金を撫でる。

ビリビリと痺れるような快感に、ピクンと体が跳ねた。

「はああッ、んあ、」

「ここはどうですか？」

「ひやああんっ！」

胸の飾りに触れられ、甘い声がかかる。

自分で弄ったこともなく、意識さえしていない場所だったのに。

軽く摘まれ、こね回されると、エマは頭を振って喘いだ。

「あんっ、ああっ、ひゃああッ」

「感度がいいですね」

「アアアッ！ んあっ……ひゃうっ」

スリ、と乳首を擦られるだけで、腰が碎ける。

こんな快感は初めてだった。

知らぬ間に昂ぶりが弾けて、蕾からは愛液がトプリとあふれる。

（ああッ……き、気持ちいい……ッ）

エマは本能のままに腰を揺らし、その先をねだった。

愛されたことのない軀は、甘い快楽を与えるルシアンに縋り付こうとしている。

頭の片隅に残る理性が、ダメだと警鐘を鳴らすのに、口から出たのは違う言葉だ。

「アアッ……んう……もつとッ」

「ここがいいですか？」

「はああんっ！ ああつ、そこお……！」

「ここも勃つようになりましたね」

ルシアンが嬉しそうな声で、エマの乳首を指で弾く。

「ひゃああっ！」

ビリッと痺れる快楽に、背をのけぞらせる。

あまりの快感に口端から唾液がこぼれ、昂ぶりは勢いよく固さを増す。

（熱いッ……あ、頭が、おかしくなりそうっ）

「こんなに素直で感じやすい乳首は、初めてです」

うつとりと囁く声に、ズクンと腰が疼いた。

いまや、ルシアンに触れるところすべてに、感じてしまう。

ピクピクと躰が跳ね、喘ぎながら、涙をこぼした。

「ひゃんッ、あう……っ、あぁっ」

「可愛いですね」

甘い囁きに、悦びで雄が震えた。

（ルシアン様が、褒めて下さったっ）

嬉しくて、つい腰を揺らしてしまう。

ぴゅるっと白濁を放つ半身は、すでに何度も達して、勢いが弱まっている。

「こんなに蜜をこぼして」

ルシアンはエマの上半身から手を離し、今度はエマの足を広げて、その

太ももを撫でた。

「あああんッ」

「ここも慣れていないのでしょう？」

ルシアンはそう言うのと、エマの秘部にフッと息を吹きかける。

「ひゃああッ」

吐息だけでピクンと震える。

「ッ、……ああっ……はあっ」

「イきたいですか？」

「あん、……あ、い、イきたい、ですっ」

問われるまま、エマは頷く。

だらしなく唇を開き、快楽の瞳にルシアンを映した。

「どちらが良いですか？」

ルシアンが優しい声で、問いかけてくる。

何を問われているのか分からず、エマは視線を下げた。

「ッ……！」

ルシアンは唇に笑みを浮かべ、獲物を狩るような眼で、エマを捕らえている。

（あああっ……ルシアン様ッ）

初めて見る雄の顔に、ゾクゾクした。

「あんッ、ああっ！」

「エマ、どっちですか？」

「ッ、んあっ……さ、触って、くださいっ」

震える手で、自らの昂ぶりを示す。

ルシアンは微笑み、エマ自身を握りしめた。

その刺激だけで、達してしまいそうになる。

（ルシアン様の手、熱いッ……！）

そのまま扱かれるのかと思えば、長い指が、先端を擦ってきた。

「ひいっ！」

思わず悲鳴を上げて身をよじった。

（だめええっ……お、おかしくなるッ！）

あまりの刺激に制止の手を伸ばすが、その手を捉えられてしまう。

「気持ちよくしてあげます」

「ひあんッ、あああッ！」

かぶりを振ったが、ルシアンの巧みな手に扱かれ、あっけなく果てた。

「ああああッ！」

自慰とは比べものにならない快感だった。

（ああッ……きもち、いいッ、きもちイイ……！）

余韻に浸り、ピクピクと震える。

あまりの快楽に、再び昂ぶりが頭をもたげた。

エマは無意識に腰を揺らし、ルシアンの手に自身を擦りつける。

「フッ。まだ足りないようですね」

エマのおねだりに、ルシアンは唇を歪めた。

その赤い瞳が興奮しているように見えて、エマの胸が高鳴る。

（ああッ、また、触ってもらえるッ！）

期待に笑みを浮かべたとたん、

「ひゃああんッ！」

ルシアンの手が、容赦なくエマの半身を扱きだした。

甲高い悲鳴をあげて、背をのけぞらせる。

「あんつ、ああつ、い、イクツ！」

ビク、ビクと軀を震わせ、精が弾ける。

果てた後も、さらに扱かれ、エマは続けて何度も達した。

「ひゃあッ、イツちゃ……あああんつ！」

あまりの快感に、エマは泣きながら果てる。

何度も熱を吐き出してようやく、ルシアンの手が離れた。

「ハアハア……ああつ」

エマは肩で息をしながら、恍惚とした笑みを浮かべる。

（ああ……イクの、きもちいい……っ）